

「見て・聞いて・体感する」  
**伝統工芸展**  
**2011開催**



あめ細工



木彫刻



建具



象牙細工(三味線駒)



江戸切子



更紗染

# 下町文化

NO. 252  
 2011.1.14

発行  
 江東区地域振興部  
 文化観光課文化財係  
 〒135-8383  
 江東区東陽4-11-28  
 TEL(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 「見て・聞いて・体感する」  
**伝統工芸展 2011 開催**  
 平成23年2月3(木)～2月6日(日)
- 芭蕉記念館企画展  
**家族の絆と文芸**  
 —夫婦・親子・きょうだい—
- 文化財の仕事に携わって
- 文化財保護推進協力員レポート  
**釜屋堀庚申堂のおまつり**
- 文化財企画講演会  
**幕末明治期深川の社会と自然**
- 江東区域の西洋瓦

## 伝統工芸展 2011 開催

「見て・聞いて・体感する」

伝統工芸展では、昔から長いあいだ、受け継がれてきた技術を一挙公開します。江東区には、多くの職人さんが住んでいますが、実演を通して見せる技は、江戸時代、いやそれ以前に生まれたものです。技術によっては、時代に合わせ、現代的な作品も制作されますが、形状が変わっても、そこに生かされた技術は、伝統的なものです。そのなかには区の歴史と深く関わるものも多く、江戸・東京の木材需要を支えた木場と木工関係の技術などは、その代表的なものです。このような技術が江東区に伝えられたこと自体、区の歴史を知るための「生きた」ヒントと言えるでしょう。

本年度は、4日間にわたって開催いたしますので、一般の方だけでなく、学校での見学にも対応いたします。平日の木曜・金曜日には、多くのお申し込みをお待ちしております。

機械による大量生産が主流の現代だからこそ、会場に足をお運びいただき、本物のわざをご覧ください。職人さんにも気軽に声をかけてお話しを聞き、楽しい時間をお過ごしください。

2011年2月3日(木)～6日(日)

# 伝統工芸展 2011

本年度の実演日程は、表に示した通りです。2月3日(木)～6日(日)

(体験もできます)

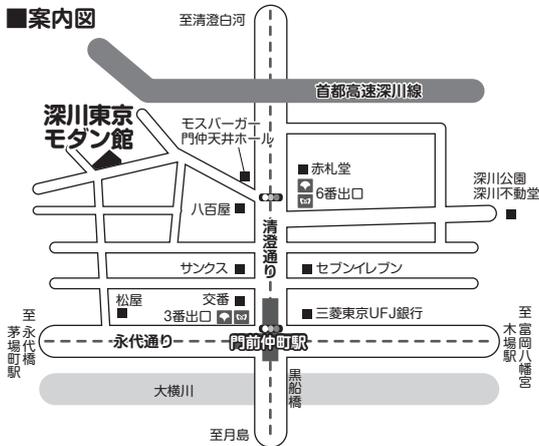
の4日間にわたって多くの技術が、区内在住の職人さんによって公開されます。日頃、見る事ができない伝統のわざを、ぜひこの機会にご覧ください。目の前で見ることで、ほんものの迫力を体感できることでしょうか。

実演の中には、見学者が体験できる職種もあります。表中に※印が付されています。会場で直接職人さんにお申し出ください。材料費が必要になります。ぜひ声をかけてみてください。せっかくのこの機会に「弟子入り」してみたいかですか。

## 伝統工芸展 2011 実演表

	1階	2階
2月3日 (木)	あめ細工(青木喜)	紋章上絵(石合信也)
		建具(友國三郎)
		庖丁製作(吉澤操)
		指物(山田一彦)*
2月4日 (金)	すだれ製作(豊田勇)*	木彫(岸本忠雄)*
		象牙細工(三味線駒)(前田賢次)
		襖楯(鈴木延坦)
2月5日 (土)	江戸切子(小林英夫・淑郎)* 無地染(近藤良治)*	木彫(渡邊美壽雄・美憲)
		紋章上絵(亀山晴男)
		建具(木全章二)*
		手描友禅(和田宣明)
2月6日 (日)	更紗染(佐野利夫・勇二)* 江戸切子(須田富雄)	染色補正(丸田常廣)
		刀剣研磨(白木良彦)
		縫紋(天野一男)
		表具(岩崎清二・晃)*

- ・実演は、都合により変更される場合があります。
- ・※の技術は体験ができます(申込は会場で直接職人さんに申し出てください)。



会場となる建物は、国登録有形文化財です。

**【日程】** 2月3日(木)～6日(日)  
**【時間】** 午前10時～午後3時  
 ※職人さんは、適宜休憩します。  
**【会場】** 深川東京モダン館  
 (江東区門前仲町1-19-15)

## 「江東区伝統工芸作品展」

開催のお知らせ

江東区の伝統工芸に関する展示会の情報をもうひとつ。2月末から「江東区伝統工芸作品展」を開催いたします。

伝統工芸展は、伝統的な技術の紹介の場ですが、あらたに作品をご紹介します。この「伝統工芸作品展」を開催することといたしました。職人さんの技術を駆使して作られた、選りすぐりの作品をぜひご覧ください。

**【日程】** 2月23日～3月27日

(月曜日休館)

**【時間】** 9時30分～17時

(入場は16時30分まで)

**【会場】** 江東区中川船番所資料館

(江東区大島9-1-15)

※入館料がかかります

### 計報

・江東区登録無形文化財(工芸技術)「庖丁製作」保持者吉澤實氏は、平成21年11月25日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

・江東区指定無形文化財(工芸技術)「縫紋」保持者天野一政氏は、平成22年6月7日にご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 家族の絆と文芸

夫婦・親子・きょうだい

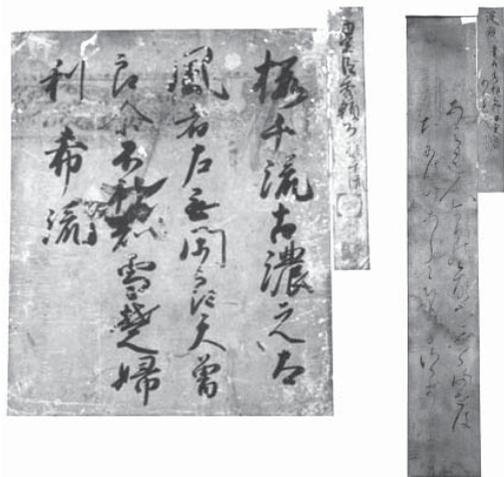
4月24日(日)まで

歴史をさかのぼると、夫婦や親子などの家族の絆をもとに、お互いがともに和歌や俳句などの文芸作品を創作していることが多く見受けられます。これは歴史の中で文芸作品の創作を通じて家族を構成したり、あるいは家族を通じて文芸作品の創作に励んでいた事実があったことを示しているのではないでしょう。

そこで芭蕉記念館では「家族の絆と文芸」夫婦・親子・きょうだい」と題しまして、近世から現代までの文芸作品を作者の家族のつながりにスポットを当て、企画展を開催します。

近世の作品としては、まず豊臣秀吉の側室淀殿(？)1615)とその子秀頼(1593)1615)の歌短冊・色紙を展示します。

また、国学を大成したことで著名な本居宣長(1730)1801)の画賛も展示します。この画賛には泉良信なる人物が描いた芭蕉像が配され、その絵に



右：(伝) 淀殿筆「あわれ人」歌短冊  
左：(伝) 豊臣秀頼筆「桜ちる」色紙

宣長が賛を加えています。この芭蕉像に対して、当時国学者として名を馳せた宣長が賛を加えているという事実

その重要性を見出すことができるのではないでしょう。そして、その宣長の子大平(1756)1833)と孫永平(1819)42)の歌短冊なども併せてご覧いただけます。

その他、代々連歌師を輩出し、「幕府御連歌始」の宗匠を務めた家柄の里村昌琢・昌程親子や、俳諧師の一家である北村季吟・湖春親子、谷口楼川・

渡辺省亭画・渡辺水巴賛「五つ来て」句画賛



鶏口親子などの作品を展示します。

近現代の作品の中で注目すべきものとして、まず渡辺省亭画・渡辺水巴賛「五つ来て」句画賛が挙げられます。

渡辺省亭(1851)1918)は世界的に有名な日本画家であり、その長男が俳人の水巴(1882)1946)です。本点は画家である父省亭が絵を描き、俳人である子水巴が賛を加えた親子合作となります。

また、俳人の一家として著名な高浜虚子一家の作品もご覧いただけます。高浜虚子(1874)1959)は正岡子規より『ホトトギス』の主宰を継承したことは有名ですが、虚子の晩年以降は、同じく俳人として活躍していた長男の年尾(1900)1979)がその主宰を継承しました。その一方で、虚子の次女立子(1903)1984)も俳人として活躍しており、父の勧めにより女性として初めての主宰誌である『玉藻』を創刊しました。今回は高浜家の作品として高浜虚子筆「心中の」句短冊、高浜年尾筆「こまやかに」句短冊、星野立子筆「梅よせて」句短冊の三点を展示します。高

浜家は、まさに家族の絆を通じて俳句の創作に励んだ一家と言えるのではないでしょう。

その他、歌人の若山牧水・喜志子夫婦、与謝野寛・晶子夫婦や、俳人の一家である飯田蛇笏・龍太親子、兄の有島武郎を筆頭に「有島三兄弟」と呼ばれた小説家の有島生馬・里見弾兄弟などの作品を展示します。

今回の展示を通して、和歌や俳句などの文芸創作に励んでいた歴史の中の家族のあり方を是非ご覧ください。なお、今回は本展示に関係する全11家族の家系図も併せて展示しています。家系図とともに作品をご覧いただくことで、より一層それぞれの家族を感じ取っていただけることでしょう。

(生島修平)

## 芭蕉記念館

## 開館時間

午前9時30分～午後5時  
(4時30分までにお入りください)

## 展示室休室

第2・4月曜日(祝日の場合は翌日)

## 入館料

大人1000円 小中学生50円

## 問合せ

江東区芭蕉記念館  
江東区常盤1-6-3  
☎03(3663)1448

# 文化財の仕事に携わって

文化財係に異動したその日、文化財専門員から「土木部が和倉橋の親柱をどうしますかと聞いています」と問いかけられたことが、係としてのはじめの仕事でした。右も左もわからない文化財、口にてた言葉が「明朝、現場を見てから判断します」と答えていました。翌朝は案の定、雨が降っていました。年金、税、土木、スポーツ、保育と様々な職場を経験し、文化財においても問題の解決はまず現場から確信した日でした。

係の仕事では、毎回緊張しながら進んでいる文化財保護審議会、毎年天候を気にしつつ木場公園で行っている木場の角乗など江東区が誇る民俗芸能の披露、なんと晴天率が8割5分7厘で雨男返上。さらに、26年続いている文化財保護推進員講習会、なぜか？別名初級講習会。以前は、この講習会の修了後にある中級研修会、文化財保護推進協力員制度もなく、この名称だけが残ってしまったのでは。

個人的な感想をお許しただければ、区内を7地域に分けてきめ細かく、掘り下げて行う地区別講習会が好きです。私自身、江東区で生まれ、育ち、



同潤会2号館屋上（筆者所蔵）

勤めてきました。子どもの頃生活していた3号館（＝同潤会清澄通りアパート）が日立機械（＝金属では？）の社宅であったことを『江東区の民俗深川編』で知りました。どおりで2号館、3号館には父親と同じ会社の人が多かったはず。ここは子どもの頃の思い出がたくさん詰まっており、特に、螺旋階段と丸屋上が有名であった1号館は、好奇心の旺盛な少年にとっては秘密の満ちた場所でした。

昨年4月、係は教育委員会から地域振興部文化観光課に組織替えがありました。当初は、私自身も戸惑いを感じていましたが、教育委員会委嘱の文化財保護推進協力員（略称 協力員）の方々は、なおさら違和感を覚えた人も

多かったのではないかと思えます。係としては、区の方針である文化財の活用と観光推進、ただし基本部分の仕事は教育委員会からの補助執行事務、今後も生涯学習事業の一環として活動を継続するなどを説明させていただきました。

今後は、文化財の活用＝観光行政を生涯学習の視点からどのように進めていくかが課題と考えています。「観光」という手法を通して文化財を周知し関心をもってもらい保存・保護の意識を育てる図式も考えられるのではないかと。文化財を確実に次世代に伝えるには、従前の枠に捉われないことなく様々な選択肢を議論しながら進めることが大事ではないかと思えます。

組織改正後でも係の大きな柱は、区民と行政が一体となって進めていく協力員活動ではないかと思えます。協力員は、初級、中級を修了し文化財保護審議会の推薦を得て最長10年間の任期のなかで、毎年2万人近く訪れる木場公園での民俗芸能大会、朝早くから職員と一緒に会場設営、案内、警備を、真冬・曇天という条件の中の定点観測調査、さらに学芸員顔負けのスケッチをされた石造物現況確認調査活動等々、協力員さんは今後も文化財行政の大切なパートナーであると考えて



和倉橋親柱

います。

また、21年3月には「江東区にも遺跡はある」と長年の懸案であった遺跡見学会を開催、周知期間がほとんどなかったにもかかわらず300人近い区民に来ていただけ、「百聞は一見に如かず」少しでも埋蔵文化財への理解が深められたのではないかと思えます。

江東区の文化財は、多くの区民に支えられていることを実感した仕事でした。これからも区民との協働をさらにすすめて「文化財」を確実に次世代へ繋げられるよう祈念します。最後に、本年度末に退職するにあたり区文化財専門員、都教育委員会など多くの学芸員の方々にご指導いただきましたことを、この紙面をお借りして御礼申し上げます。

（文化財係長 楠 勤）

# 釜屋堀庚申堂のおまつり

REPORT

平成22年5月11日、大島一丁目にある釜屋堀庚申堂でおまつりがありました。年に一度、おまつりが行われているのですが、昨年ではなかったのか、それとも私がそこを通らなかつたのか。今年はずうと居合わせることができ、子供たちが大勢来て、お菓子や飲み物が振る舞われていました。

私はこの法要に興味を持ったので、いろいろと調べてみました。昭和7年(1923)に大島町役場が発行した『大東京市併合記念大島町誌』によれば、庚申堂の説明として「旧大島村甲七十番地にあり、路傍石猿田彦太



平成22年5月11日の法要

## むかしの庚申道と庚申堂



神を祀る。境内地五坪で建坪間口五尺奥行九尺あり、その建立の由緒は未詳である。」と記されています。庚申堂の説明はありますが、おまつりのことについては特に分かりませんでした。そこで、現在の大島一丁目町会長の松土さんにお話を伺いました。昔のことをご存じの方がだんだんいなくなってきました。町会でまとめた昭和38年(1963)12月に出された資料に、この法要のことが記してありました。内容を整理すると次のようにな

ります。

○大島一丁目町会の有志で庚申堂を信仰する59人の方たちの募金が集まった。それ以降は町会でおまつりを行っている。

○庚申堂のおまつりは、年が明けて最初の庚申の日に行われたが、都合によって日時を変更する時もあった。

○おまつりは夕方から行われた。

○昔は200人もの子供たちが集まった。今は塾などに通うこともあり、人数も少なくなった。

○子供たちは、いつになってもお菓子を貰うことを楽しみにしていた。



現在の釜屋堀庚申堂

庚申堂の法要は、特に宗派はなく、現在の副会長が大島3丁目の羅漢寺の檀家であるので、羅漢寺のご住職にお経をあげて頂いているそうです。ただ、今年都合によって大島4丁目の浄楽寺のご住職がお経をあげました。

明治通りから横十間川に向かって伸びる東西約350メートルの道路は、「庚申道」と呼ばれ、区の登録史跡となっています。かつて庚申堂は「三つまたの庚申様」と呼ばれ、丁字路の突き当たりになっていましたが、昭和62年(1987)に少し南側の現在地に移りました。

法要の時、町会の方にお線香を渡されたので、ズカズカと前に出たら、後ろに並んでいる人に「並ぶのよ!」とえらく怒られてしまいました。普段はしんと静まりかえっているのに、この日はすごく賑やかでした。このようなおまつりが今後も長く続いて欲しいと思いました。

このレポートをまとめるにあたって、大島一丁目町会長の松土さんをはじめ、町会の方々に色々とお世話になりました。また、レポートの作成にあたっては、文化財専門員の龍澤さんにお手伝い頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

(文化財保護推進協力員 坂本住子)

## 幕末明治期深川の社会と自然

東京大学名誉教授・元国立歴史民俗博物館館長

## 宮地正人先生

深川は水と深い関わりを持っている土地です。水運が衰えた明治末年でも、深川区には水路から荷物の揚げ下ろしをする河岸が47もありました。当時

も深川は「水郷」と呼ばれ、その名に背かない景観と汐の香りが漂っていた土地でした。その深川が幕末から明治末年にかけてどのように変化していったのか、社会と自然の両側面からお話しします。

江戸の湊とは、江戸のどこを指すでしょうか。実は、江戸の海に面した、西は品川から東は深川までの海岸線が江戸の湊でした。この中で、深川の大川（隅田川）に面した佐賀町あたりは絶好の場所でした。大川は江戸の大火を食い止める「防壁」でもあります。また、土地の値段が相対的に安かったため、無数の蔵が立ち並びました。佐賀町は満潮になると、蔵が立ち並びぶ岸と、荷物を積み下ろしする小舟とがちやうど同じ高さとなる土地柄でした。大金を投じて港湾施設を建設する必要がなかったのです。江戸の廻船問屋の多くがこの地に蔵と店を持ち、干鰯問屋

や海産物問屋を兼業していました。それが幕末から明治の佐賀町あたりの雰囲気でした。

深川は海だけではありません。河川交通の上でも江戸の町の中で重要な土地でもありました。小名木川がその大動脈でした。

江戸湾に房総半島側から急角度で入ることは、和船の技術では困難です。そのため、銚子で荷物を高瀬舟に積み替えて利根川を遡り、関宿から江戸川、行徳から新川に入り、中川番所で厳しい検査をされた上で、小名木川に入り、大川に出、そこから江戸の各商店に荷物が届けられました。

銚子から遡るばかりが利根川水運ではありません。霞ヶ浦、北浦、そして小貝川、鬼怒川、渡良瀬川。そして上州・武州の利根川上流からも商品は江戸にきます。あと一つ。中川自身が、河岸の多い水運の豊かな川でした。これら全てが小名木川を通して江戸に入ります。さらに大川の上流、今の埼玉県の荒川沿いにも多くの河岸が作られ、物資が江戸に運ばれていきました。

海からも河川からも、江戸の中で深川という土地は格好の場所を占めていました。それを象徴するのが木場です。山奥で伐り出された木材は筏に組まれて川を下り、海路で江戸に運び込まれます。木造建築と頻繁な大火は、木材を江戸で最重要の商品に押し上げていきます。しかし木材というのは非常にかさばります。長く保管しなければならず、さらに木材は乾燥する時間が相当かかります。水に浸かった木材は建物には使えません。地価の高騰している所は備蓄地としては不適切。しかも、

広い場所が必要となります。深川の木場は、選ばれるべくして選ばれた土地です。海から縦横無尽に掘られている水路を使って木材が運び込まれ、貯蔵・乾燥され、製材されて江戸の各地に運ばれて行きました。全国的な取引を行い、多額の資本を必要とする木場の材木商人は、江戸商人の中でも屈指の豪商となつていきます。ただし、木材は民間需要だけでなく、幕府の需要も相当ありました。猿江には広大な猿江御材木蔵がおかれ、幕府の御用材が大量に運び込まれました。

深川には大名の下屋敷が数多くあり、その広さを活かして色々な目的に使われていました。幕末期になると、時代に即応した使われ方をされるようにな

ります。その好例が、永代橋の近くにあった信州松代藩真田家の下屋敷です。松代藩の西洋砲術家佐久間象山はこの下屋敷で、ペリー来航の数年前から砲術塾を開いていました。1851年、吉田松陰が生涯我が師と仰ぐ象山に初めて出会ったのもこの下屋敷でした。象山は新橋木挽町に自分の塾を移した後、手狭な木挽町の塾ではなく、深川の下屋敷で西洋流の訓練をやりま。また、彼が依頼を受けて製造する洋式大砲の製造もこの下屋敷で行われていました。幕末期、この深川にあった各藩の下屋敷もほぼ同じような利用が頻繁にされていたのです。幕府も、部隊訓練をする場所を深川に求め、1855年に越中島練兵場を創立します。そして、幕府の軍事力強化につとめます。

深川は寺も非常に多かった土地です。その最たるものが永代寺と富岡八幡宮です。江戸時代は神仏混淆の時代。より正確に言えば、仏教は国教で、神道と神社が寺に従属しているのが江戸時代でした。深川の永代島に創られた永代寺がもとになって開発が進み、1699年に永代橋が架けられると、永代寺門前の町々が次第に繁盛するようになります。富岡八幡宮は、この永代寺が別当として支配していた神社でした。永代寺は庭園が有名で、江戸の

市民の格好の遊樂地でした。また、成田山の御開帳をはじめ、日本各地の秘仏の御開帳が行われ、小芝居がかけられ、料理屋が作られ、深川の中ではとても繁華な土地になっていきました。

明治維新によって深川で何が最も変わったかという点、深川における寺と神社のあり方です。多くの旗本・御家人は静岡に無縁移住を強制されました。旗本や御家人が檀家であったからこそ維持できていた多くの寺は、廃寺

となるか境内地を縮小せざるをえなくなりません。ただし永代寺は特別です。永代寺と富岡八幡宮は、神仏分離の原則によって別々の組織になったのではないのです。永代寺の住職自身が還俗して富岡という姓を名乗り、神官となります。永代寺は廃寺となり、御開帳も行われなくなります。こうして、富岡八幡宮界隈は江戸時代の宗教・信仰・遊樂の地から性格を変えていきました。1873年、欧米のparkにならい、永代寺旧境内などが深川公園となります。深川不動堂ができたのは明治に入ってからです。

維新後、大名・旗本屋敷のほとんどが新政府に収公され、大名は江戸屋敷を一つだけ残すことが許されました。仙台藩下屋敷跡には、工部省によりセメント工場が作られ、浅野総一郎に払

い下げられて浅野セメントとなります。

幕府御材木蔵は宮内省御寮局貯材所となりました。関東大震災後には猿江恩賜公園となります。関宿藩下屋敷跡には三菱の岩崎弥太郎によって三菱会社社員の庭園「深川親睦園」が作られました。関東大震災で深川親睦園が大破すると、三菱は親睦園を東京市に寄付し、清澄公園・清澄庭園となりました。

1871年に廃藩置県が断行され、260余あった藩は廃止されました。さらに地租改正によって年貢は金納となります。江戸時代、藩は年貢米を江戸・大坂に輸送し売却していましたが、明治になると米の販売は各県で行われることとなります。商品となった米を、三井組などの商社や廻船問屋が買って付けて東京に輸送・販売します。彼らは豊富な資金力と輸送用の船を持っていました。その中心は深川の商人で、1884年の東京の廻米問屋16名の半数が深川の廻米問屋でした。1886年、深川に東京廻米問屋市場が成立し、東京の米相場が深川で立ちます。

1890年代、日本では船舶輸送から鉄道輸送への転換が起こり、交通体制が大きく変わります。その大きな影響を受けたのが深川でした。

上野には東北から鉄道が乗り入れており、上野―秋葉原間が開通すると、

東北の米が鉄道で秋葉原に運ばれるようになります。秋葉原の近くには船だまりができ、米は秋葉原から船で深川の倉庫へ運ばれました。それまでは船は1艘(500石積み)が取引の単位でしたが、鉄道の導入によって貨車1台(46石積み)が取引の単位となります。これによって、米取引に必要な資金が少なくなり、市中の米穀問屋が直接産地と米を取引することが可能になりました。1896年に常磐線の田端

―水戸間、1897年には総武鉄道(現総武線)の本所(現錦糸町駅)―銚子間が開通します。鉄道だと東京―銚子は5時間、蒸気船だと18時間です。鉄道の導入により深川は大きく変貌せざるを得なくなり、倉庫業が基幹産業として本格化していきます。

小名木川両岸は、特に日露戦後に工業地帯となり、労働者と人夫の町となります。ただし、材木販売は相変わらず盛んでした。

深川は高潮の被害を受けやすい土地です。1791年の高潮は深川に江戸時代最大の被害をもたらしました。1856年には百年に一度といわれる猛烈な台風によって大川が氾濫しました。これに匹敵するのが1910年8月の洪水です。深川区内ではほとんどの家が水に浸かりました。この事態に

国家レベルでの対応がはかられ、荒川放水路が開削されました。これにより、大川の水量は五分の一になったといえます。しかし、荒川放水路は中川を分断するため、中川放水路や新中川建設も関連した大工事となり、また、250〜320間の川幅分の農地・町屋の買収は難事業でした。荒川放水路の通水式は1924年10月12日ですが、新中川の完成は戦後の1963年になってからでした。

最後に、現在、深川の河川は高度経済成長期よりも相当奇麗になりました。ただし、昔への単純な回帰ではありません。深川の低地という特色・埋立地という地盤の悪さとの戦いの中で何とか達成したものです。上水道と下水道の維持、河川の水位の管理、高潮の対策、防災施設と緑地帯の設置と拡大など、江東区・東京都・国だけではなく、地域住民の、防災と、地域をよりに人間らしい地域にするための自覚と努力なしには決してなしえなかったものなのです。今月は1910年8月の大水害から百年。深川の住民の苦しみを思いつつ、防災の課題、自然と人間のあるべき形に思いを致したいと思いません。

※この記録は、平成22年8月6日(金)に行われた講演会の要旨です。

# 江東区域の西洋瓦

「亀戸浅間神社出土資料と猿江の工場」

平成21年4～6月に、中川船番所資料館にて「江東区にも遺跡はある！」江東区埋蔵文化財展」が開催されました。この際展示した亀戸浅間神社出土の西洋瓦について、この誌面にて再度ご紹介するとともに、猿江に存在した西洋瓦の工場についてもご紹介いたします。

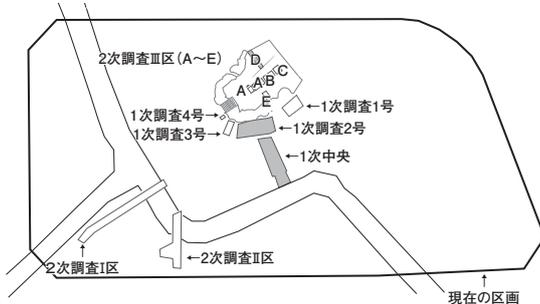
## 亀戸浅間神社出土の西洋瓦

東京都の防災再開発事業に伴い、平成8年（第1次）と同10年（第2次）の2回にわたり、神社境内とその周辺を対象に発掘調査が行われました（第



亀戸浅間神社の位置と深川猿江町の範囲

1次調査については『下町文化』No.176で紹介しています。調査の結果、ほとんどは近現代の表土が厚く堆積し、近世の陶磁器類のほか、瓦、瓶類など近代瓦はほとんどが和瓦ですが、西洋瓦11点（富士塚直上のⅢ区から3点、富士塚南の2号と中央トレンチから8点）が含まれていました。11点のうち4点はジェラール瓦、7点は日本の瓦職人がその瓦を模した模倣ジェラール瓦に分けられます。ジェラール瓦は、横浜山手の居留地で製造されたもの



調査位置



調査風景



出土した西洋瓦  
左：ジェラール瓦  
右：中央：模倣ジェラール瓦

で、I～Ⅲ型のうちⅡ型（1876～1889年の製造）しか発見されていません。

これらの瓦は同時期に廃棄されたと考えられます。社殿は明治11年（1878）と、関東大震災後の昭和5～9年（1930～1934）に改築され、いずれも富士塚上にありました。廃棄されたのはいずれかの工事前と考えられますが、なぜ西洋瓦が神社の境内に廃棄されたのでしょうか？近隣にこの瓦を葺くような洋館が存在したという記録は残っておらず、謎だらけの状況です。

## 猿江にあった幻の西洋瓦工場

今回の展示に際し、青木祐介氏（横浜市発展記念館）、坂上克弘氏（元横浜市埋蔵文化財センター）に前述の西洋瓦を鑑定していただき、展示期間中に両氏が来館されました。展示観覧後、常設展示室で江東区の地図をご覧になった青木氏から次の指摘がありました。それは、東京大学大学院所蔵の模倣ジェラール瓦にある

「Gohnnatsuou Tamoura（五本松田村）」銘は、『明治十年内国勸業博覧会出品目録』にみえる「深川猿江町田村三五郎」と同一人物ではないかと疑っていたが、五本松がどこの地名を指すのか不明だった。しかし、五本松

瓦の形状・色	産地
煉化石(一) 黒瓦	東京下小泉彌吉
煉化石(二) 赤瓦	小宮長次郎
煉化石(三) 深木田土	松原善左衛門
煉化石(四) 王砂	島村武兵衛
煉化石(五) 上木	細谷伊助
瓦(一) 煉化石三角	浅香熊次郎
瓦(二) 切込	小川徳次郎
瓦(三) 赤瓦	田村三五郎
瓦(四) 西洋形	田村三五郎
瓦(五) 大形	田村三五郎
瓦(六) 大形	田村三五郎
瓦(七) 大形	田村三五郎
瓦(八) 大形	田村三五郎
瓦(九) 大形	田村三五郎
瓦(十) 大形	田村三五郎
瓦(十一) 大形	田村三五郎
瓦(十二) 大形	田村三五郎
瓦(十三) 大形	田村三五郎
瓦(十四) 大形	田村三五郎
瓦(十五) 大形	田村三五郎
瓦(十六) 大形	田村三五郎
瓦(十七) 大形	田村三五郎
瓦(十八) 大形	田村三五郎
瓦(十九) 大形	田村三五郎
瓦(二十) 大形	田村三五郎
瓦(二十一) 大形	田村三五郎
瓦(二十二) 大形	田村三五郎
瓦(二十三) 大形	田村三五郎
瓦(二十四) 大形	田村三五郎
瓦(二十五) 大形	田村三五郎
瓦(二十六) 大形	田村三五郎
瓦(二十七) 大形	田村三五郎
瓦(二十八) 大形	田村三五郎
瓦(二十九) 大形	田村三五郎
瓦(三十) 大形	田村三五郎
瓦(三十一) 大形	田村三五郎
瓦(三十二) 大形	田村三五郎
瓦(三十三) 大形	田村三五郎
瓦(三十四) 大形	田村三五郎
瓦(三十五) 大形	田村三五郎
瓦(三十六) 大形	田村三五郎
瓦(三十七) 大形	田村三五郎
瓦(三十八) 大形	田村三五郎
瓦(三十九) 大形	田村三五郎
瓦(四十) 大形	田村三五郎
瓦(四十一) 大形	田村三五郎
瓦(四十二) 大形	田村三五郎
瓦(四十三) 大形	田村三五郎
瓦(四十四) 大形	田村三五郎
瓦(四十五) 大形	田村三五郎
瓦(四十六) 大形	田村三五郎
瓦(四十七) 大形	田村三五郎
瓦(四十八) 大形	田村三五郎
瓦(四十九) 大形	田村三五郎
瓦(五十) 大形	田村三五郎

『明治十年内国勸業博覧会出品目録』  
(国立国会図書館所蔵)

が猿江にあることから、猿江と五本松が同一である、ということでした。『新撰東京名所図会』（明治42年）などに、深川猿江町の通称名が「小名木川通り五本松」とあるため、東京大学所蔵の瓦が猿江で造られていたことが決定づけられたと言えます。

前述の目録には、明治8年（1875）に開業した田村三五郎が「西洋形瓦」を出品したと記されています。『日本商工營業録』（明治31年）の深川猿江町の項には、田村の名や瓦工場が見えないことから、明治31年以前に移転もしくは廃業していることが考えられます。この工場の場所は不明ですが、旧深川猿江町域のどこかに近代の瓦工場の痕跡が地下に眠っているかもしれません。

（文化財専門員 野本賢二）